

中国における高齢者虐待の問題 (1)

——とくに、その定義について——

張 萍

〔抄 録〕

本稿の目的は、中国における高齢者虐待を定義付けることにある。人口高齢化の加速と高齢者人権意識の高まりにつれて、高齢者虐待という元来家族の内部に隠された潜在的な問題が、すでに顕在化した社会問題になってきている。しかし、中国はまだ「高齢者虐待防止法」を制定しておらず、高齢者虐待の定義も確定されていない。高齢者虐待の実態を把握するためには、その定義を明確化する必要がある。敬老の伝統を持つ中国では、高齢者虐待の行為は真っ先に道德違反のものとして世論から非難を浴びせられる。その行為が重い場合、違法犯罪のものとして刑罰の対象となる。それゆえ、高齢者虐待の定義を考える際に、道德と法律という二つの側面から捉えなければならない。現代中国の道德規範と法規定は昔のものとはずいぶん異なっているが、従来から継承したものもある。本稿では主に親子関係を軸にして、高齢者権益に関わる道德規範と法規定の変化を歴史的な視点から整理したうえで、中国の高齢者虐待に定義を下すことを試みた。

キーワード 高齢者虐待、親不孝、道德規範、法規定、定義

は じ め に

高齢者虐待問題は、昔から世界各地に存在する社会問題である。しかし、この問題が世界範囲で人々の関心を喚起したのは1980年代以来のことである。1991年12月16日、国連総会は、自立、参加、ケア、自己実現、尊厳という高齢者の地位に関連する五つの領域にわたる「高齢者のための国連原則」を採択した。その中の尊厳とは、高齢者は「①尊厳及び保障を持って、肉体的・精神的虐待から解放された生活を送ることができるべきである。②年齢、性別、人種、民族的背景、障害等に関わらず公平に扱われ、自己の経済的貢献に関わらず尊重されるべきである」というものである⁽¹⁾。

国連の呼びかけに呼応して、中国では 1996 年 10 月 1 日に「高齢者権益保障法」が施行された。高齢者人権擁護の潮流の中で、高齢者虐待という元来家族の内部に隠された潜在的な問題が、しばしばマスコミに登場し、顕在化した社会問題になっていた。しかし、今日になっても、中国がいまだ「高齢者虐待防止法」を制定しておらず、高齢者虐待に関してははっきりした定義もない。われわれは現在中国で起きている高齢者虐待の実態を把握するためには、まずその定義を明確化する必要がある。

歴史を遡ってみると、四千年前の夏王朝（BC 2070 年～BC 1600 年）から、中国にはすでに高齢者を大事にする伝統が形成され、高齢者の尊厳と権益を守るための道徳規範と法規定も作られた。現代の中国はこれらの伝統の一部を受け継いでいる。

また、社会保障制度が比較的完備され、老人ホームの利用率が高い先進諸国では、高齢者虐待事件の多くは老人ホームなどの施設で起きている。これに対して、社会保障制度の整備が遅れ、老人ホームの利用率が低い中国においては、成人子女が親を扶養するのは必須義務として道徳と法に定められているため、高齢者虐待事件も主に年をとった親と成人子女の間に発生している。

以上の要素をふまえて、本稿では主に親子関係を軸にして、歴史的な視点から中国の道徳規範と法規定の変化を辿りながら、現在の高齢者虐待の定義を考えてみたい。

1. 道徳基準による定義

いわゆる道徳とは、一定の価値観を共有する社会において生まれ、通用するような行為規範、社会的慣習である。道徳判断の基準は時代によって変化した部分もあるし、ずっと変わらない部分もある。

「百善は孝を先となす」という諺の通りに、中国では、古代から現代まで絶えず変わらない徳目の中に「親孝行」というものがある。親に孝行を尽くす行為は称賛すべきものとして是認され、あるいは義務として命じられ、親不孝の行為は非難すべきものとして否認され禁止される。

中国人の言葉使いから見ると、「親不孝」という言葉には、「親虐待」（高齢者虐待）の意味をも含める。「親不孝」は「親孝行」の反対語で、「親孝行」の内容がわかれば、「親不孝」の内容も推論できる。ただ、「親孝行」の行為はずっと称賛されてきているにもかかわらず、その具体的な内容は時代によって変化してきたことを看過してはならない。

「孝」という考えはいつ中国の社会で生まれたのかについては、学者によって様々な見解がある。これは人間が自分を生み、育ててくれた親のご恩に報いる自然な感情として、人類社会とともに生まれたものだと考えている学者もいるし、「孝」は家父長制度の秩序を維持するための徳目として、父系社会の誕生に起源したものだと考証している学者もいる。また、中国殷

周時代の甲骨文⁽²⁾のなかにすでに「孝」という文字が現れたため、「孝」の概念が遅くとも殷商時代に生まれたのだと考えている学者は最も多い。

古代中国において、「孝」とはどのようなものなのか。『説文解字』⁽³⁾によれば、「孝」の文字構造は老の省略体「耂」と「子」の組合せから成り、子が老いた親を助けささえる意味を表す。

中国古典の記載によると、力強く「孝」の道徳を普及させたのは、紀元前12世紀の周公である。彼は周の文王の子で、兄である武王を助けて商王朝（BC 1600～BC 1046年）を滅ぼし、西周王朝（BC 1046～BC 771年）を樹立させた後、商王朝の滅亡の教訓を汲み取り、社会に身分制度およびそれに相応しい道徳的規範（礼楽制度）を作ったが、「親孝行」と「敬老」がその中の重要な内容であった。当時の高齢者たちは様々な優遇政策を享受した。例えば、「致仕した七十歳の者は、参朝したとき、君へのあいさつが済めば朝事が終わらない前に退出する。八十歳には毎月、君は膳を贈り、その安否を問う。九十歳には毎日、君からの常膳がある。五十歳になると夫役を免れ、六十歳には軍役を除かれ、七十歳には賓客の応対から外され、八十歳には祭祀や喪事にあずからない」。高齢者の面倒をよりよくみるために、その家族への賦役も軽減された。「八十歳の者は、その一子を夫役から免除し、九十歳の者は、すべての家人を夫役から免除」する。さらに、地方政府から中央政府まで、定期的に高齢者を招待し養老の礼を行った。「およそ養老の礼は、有虞氏は燕礼（宴席に魚・肉を用いた料理とお酒を備え、飯はないが、酒は酔うまで飲む）を用い、夏后氏は饗礼（賓客をもてなすに最も儀式の多い礼で、献酌の数は尊卑によって異なる）を用い、殷人は食礼（飯と魚・肉を用いた料理を備え、酒は設けるが飲まない。飯を主とする礼である）を用い、周人は前三代の礼をとって、併せ用いる」⁽⁴⁾。

周公自身は父祖に対してよく孝行を尽くした「孝子」であるため、彼の孝行に感化された臣民は心から西周王朝の統治に服従した。このようにして、社会には乱臣賊子が現れることなく、天下は平和が保たれていた。

周公が原始儒家に聖人として崇められ、彼が作った「周礼」すなわち西周王朝の社会制度への復帰は、儒学の祖である孔子が一生の努力の目標としたものであった。

孔子は周公が提唱した孝道を体系的に理論化した人物である。彼が生きた春秋時代（BC 770～BC 476年）の末期は、礼楽が崩壊し、乱臣賊子が頻出した戦乱の時期であった。乱世を終息させ、西周のような太平の時代を再現するためには、まず西周時代の道徳規範を復活させて、混乱した人間関係を正さなければならないと、孔子は考えた。「法律や命令だけの政治で人民を指導し、人民を規制しようとし、これに従わない時は刑罰を以て臨むなら、人民はその刑罰を免れさえすればよいとして、悪いことをしても恥ずかしいと思わなくなる。ところが、道徳を以て民を導き、礼儀を教えて民を統制していくと、人民は悪いことをすると羞恥を感じるようになって、おのずから善に至るものだ」⁽⁵⁾という。

孔子は、親子関係が人間関係の根本であるため、社会の太平を保ちたい君主が、率先して親に孝行を尽くさなければならぬと主張した。君主が人間愛の道を立てるために、まず君主自身が親を愛することからはじめ、それによって民に人間が互いに愛し合うべきことを教えるのである。「人民を孝で親につかえ、従順な気持で上の命令をきくように導いていくな、天下の平和はいつまでも続くであろう。」⁽⁶⁾

孔子をはじめとする儒者が提唱した「孝行」には、主として次の内容が含まれる。

第一は、子が経済的に父母を扶養することである。父母の衣食を満足させ、冬には暖かく、夏には涼しく過ごせるようにすることは、子が両親に仕える最低限の義務である。父母を扶養する財力を保つために、子としてはまた身の振る舞いを慎み、儉約して浪費しないことを注意しなければならない⁽⁷⁾。

第二は、子が心から父母を尊敬することである。孔子によれば、親への敬愛の心は物質的な扶養よりもっと重要なものである。犬や馬も人からよく養われているので、親を尊敬する心がない扶養は親不孝とも言える。いつも優しい表情で父母に仕えることは、「親孝行」の中でも最も難しいことである。貧しいため父母にお粥やお水だけを飲ませる子でも、父母に楽しんで暮らせるさえできれば「孝行」を尽くしたと認められる⁽⁸⁾。

第三は、子が父母の年を知り、父母の病気を心から心配することである。父母の長寿を喜ぶと同時に、父母の健康や不慮の災をも心配して、一日を惜しんで孝養すべきである。父母が病気で苦しんだ時、それを心から心配する子は、自分自身の言動とくに娯楽や飲酒などを慎まなければならない⁽⁹⁾。

第四は、子が立身出世を以て父母の名を世間に広く光輝させることである⁽¹⁰⁾。つまり、両親に孝行を尽くしたい人が身を修め、徳を磨き、立派な人物になるべきである。人々は立派な人物の父母にも関心があるから、その人の父母が自然と名を揚げる。この方法で父母を楽しませることは最大の孝行だと思われる。

第五は、父母に過ちがあった場合、子が直言して諫めるべきことである。子は父母の言いつけに従順であらねばならないが、しかし、父母が間違いを犯した場合、子としては諫め争わなければならない。こうすれば、父母が不義に陥ることを避けることができる。たとえ父母がその諫めを聞き入れない場合でも、子は父母への敬意を失わず、誠意を以て、柔らかい言葉で冷静に親の誤りを正すべきである⁽¹¹⁾。

第六は、親を心配させないために、子が自分の身体の安全を大事にしなければならないことである。父母が生存中、子が友人のために死の危険を伴う敵討ちを引き受けてはならず、できるだけ遠いところへの外出を慎み、やむを得ず遠方へ行く場合は、必ず自分の行き先を父母に教え、安心させるべきである⁽¹²⁾。

第七は、父母が生存中、子が戸籍や家計を別にしないことである。つまり、子が自分の私有財産を作らず、家のことはすべて家長の管理に任せるべきである⁽¹³⁾。

第八は、子が家を継続させるために、男の子を産まなければならない。祖先の祭祀を非常に重視する儒者にとって、子孫を絶やしてしまつて、祖先を祭る者がなくなることは、一番の不孝だと考えられた⁽¹⁴⁾。

第九は、父母が生存中、子が父母の教えに従い、父が没後の喪中の三年ぐらいには、父が作った家風などを改めないことである⁽¹⁵⁾。

第十は、父母が死んだ場合、子が礼に従って父母の葬式を出し、服喪することである。つまり子としては、死んだ父母のために多額のお金を使い盛大な葬儀を行ない、三年の喪に服し、また喪中に飲食の節減や性愛行為の禁止というような謹慎禁欲生活を守らなければならない⁽¹⁶⁾。

以上の原則を守った人は、「孝子」として称賛されるべき、違反した人は、人間ではないとして世間からの軽蔑および法による懲罰を受けるべきだと、孔子などの原始儒者らは考えた。

漢代 (BC 206～西暦 220 年) になると、儒学は国家思想として官学化したと同時に、「孝」の道徳は、親子関係を規制するだけでなく、家族と国家の関係、臣民と君主の関係を律する重要な原則にもなった。漢武帝が「孝により国を治める」ことを国策として確立した後、孔子の「孝」の理論を記述した『孝経』は皇族から庶民までの必読書となった。官僚を登用する際に、親に孝行を尽くすことは重要な基準になり、毎年人口 20 万につき 1 人の割合で、各郡は郷里における孝弟廉潔の徳行に優れた人物を官僚候補者として中央政府に推薦した。「親孝行」という品格を持たない人なら、いくら才能があっても官僚になる可能性はなかった。

漢代の為政者はなぜこのように「孝」という道徳を重視したのか。家族を大事にし、親に孝行を尽くす者は必ず他人にも愛の心で接し、君主にも忠誠心を持つことができるから、社会には孝子が多くなれば、人間関係が睦まじくなり、皇帝に逆らつて暴動を起こすような人がいなくなり、政権の安定をも保つことができると考えられたわけである。為政者の思惑の通り、「親孝行」の提唱は確かに当時の社会秩序を安定させるために重要な役割を果たし、漢王朝は 400 年にわたって統一国家を維持した。漢以後清末までの歴代王朝は、いずれも例外なく漢王朝に倣い、儒学を国家思想としたと同時に、「孝により国を治める」ことを重要な政治原則として守ってきた。少数民族政権も、漢民族政権と同じような統治手段を講じた。漢民族の「親孝行」の精神を自民族の民衆に習得させるために、北魏の孝文帝 (鮮卑族) や金 (女真族)、元 (モンゴル族)、清 (満州族) の皇帝はいずれも『孝経』を自民族の言語に翻訳することを命じた。とりわけ最後の王朝であり、最長の少数民族政権でもあった清代では、皇帝たちは自ら『孝経』を注釈し、画家に『孝経図』を書かせて孝子の業績を褒め称え、国家官僚を選抜する科挙試験に『孝経』の内容を入れさせ、「親不孝」の人を厳罰に処すなど様々な方法を通して、「孝」という道徳の普及に全力を尽くした。

中国皇帝の国家統治方法について、フランスの啓蒙思想家モンテスキューはかつて次のよう

に評価した。「中国の立法者は統治の目的を帝国の安寧においた。従属こそはそれを維持する最良の手段であると彼らには思われた。この観念において、彼らは父祖に対する尊敬を鼓吹しなくてはならないと考え、このためにあらゆる力を集中した。彼らは、生前においても死後においても父祖を尊崇するため、無数の礼や儀式を定めた」。「父祖に対する尊敬は、当然のこととして、父祖を表わすあらゆるものと結びついていた。老人、主人、為政者、皇帝がそれである。父祖に対するこの尊敬は、その子に対する愛の褒賞を前提としていた。したがって、老人の青年に対する、為政者の彼らに従属する人々に対する、皇帝の臣下に対する同じ褒賞が前提とされた。こうしたことすべてが礼を形成し、そしてこれらの礼が国民の一般精神を形成した。」⁽¹⁷⁾モンテスキューは中国を訪れたことがないが、しかし、彼の論評は確かに「孝」という道徳と政治との関わりの要諦を掴んでいた。

実際には、漢代以後の「孝」という道徳の普及は、その内容の激しい変形をも伴っていた。漢代、とくに宋代（960～1279年）以後の「孝」の内容は原始儒家の主張とはかなり異なっていた。孔子や孟子という原始儒家の思想の中では、親の子に対する慈愛と子の親に対する「孝行」は、相互に関係し合って成立していた。すなわち、親が慈愛の心で子を育てたから、子が親に孝行を尽くすべきである。ところが、漢代以後、このように親子双方に課せられた義務は「父は子の綱」に変わって、子の親に対する絶対服従という一方的な義務だけが強調されるようになった。「世の中には間違いを犯した父母はない」「父は子に死を命令しても、子は従わなければならない」などの古い諺がある通り、子供の自由ないし権利は無視された。

しかも、世間に称賛された「孝行」の中で、自然な人間性にもとったものも現れた。例えば、唐代には、人の肉を薬餌としたら持病が治るという噂が広がって、父母の病を治すために、自分の股の肉を切り取って薬餌とした孝子も現れた。皇帝がこのような孝子を大々的に表彰したので、民衆が先を争ってまね、優れた「孝子」になるための自傷は一時的に社会ブームになってしまった。これは明らかに「身体の安全を守ることは孝の始まり」という孔子の教えに違反したものである。

あの有名な『二十四孝』の中に、次のような理不尽な話もある。貧しい郭巨は母、妻と3歳の息子を養っていた。郭巨の母は孫を可愛がり、自分の少ない食事を分け与えていた。母の健康を心配していた郭巨が妻に「我が家は貧しく母の食事さえも足りないのに、孫に分けていてはとても無理だ。子供はまた授かるだろうが、母親は二度と授からない。この子を埋めて母を養おう」と言った。妻は悲嘆に暮れたが夫の命には従い、三歳の子を連れて埋めに行く。郭巨が涙を流しながら地面を少し掘ると黄金の釜が現れ、その釜に「孝行な郭巨に天からこれを与える。他人は盗ってはいけない」という文字が書いてあった。郭巨と妻は黄金の釜を頂き喜び、子供と一緒に家に帰って更に母に孝行を尽くした。この物語は父母に孝行を尽くした人には必ずよい報いがあることを述べたものであるが、逆に考えてみると、もし黄金が掘り出されなければ、あの可愛い子供は殺されてしまっただろう。

「孝子」を称賛する目的は、父母の尊厳と権威を強めることにある。伝統的な中国では、国家における支配関係が一種の家族関係の擬制として現れ、皇帝は民の父母であり、民は皇帝の赤子であるといわれるように、「孝子」の養成はすなわち「忠臣」と「従順な民」を育つことである。愚かな「孝行」への提唱は必ず統治者への盲従をもたらす。

清代(1644～1911年)になると、さらに「慈悲深い親に孝行をする子供は珍しくなく、頑迷な父に仕えて孝行を尽す人物こそ、真の孝子である」、「英明な君主に忠義を尽す家臣は珍しくなく、暗愚な君主に仕えて忠義を尽す人物こそ、真の忠臣である」、「賞賛されて忠孝に励む人は珍しくなく、責罰されてもお忠孝を尽す人物こそ、真の忠臣孝子である」というような無理な道徳価値が確立されていた。清末の有名な政治家である曾國藩(1811～1872)は『家書』の中に次のように書いている。君主と父親の尊厳を守ることは、社会の安定を維持するための必須な条件であるため、「君に仁徳がなくても、臣は忠誠心を持たなければならない、父に慈愛がなくても、子は孝行を尽くさなければならない」という。

このようにして、孔子をはじめとする儒者が提唱した「孝」の道徳は、完全に不平等な家父長制度および不合理な政治統治を維持するための道具となってしまった。中国人は親に隷属するだけでなく、孝悌の倫理に支えられた皇帝に隷属するという二重の意味で自由なき存在となっていた。

したがって、個性解放、自由、平等、民主主義と社会正義を求める20世紀の革命の嵐の中で、孔子および彼が提唱した「孝」の道徳は真っ先に社会批判と文化批判の矢先となった。残念なのは、弊害を直そうとしてかえって行きすぎたことである。特に1966年から1976年までのいわゆる「文化大革命」のなかで、子供が公に両親の「反革命言動」や「資本主義思想」を告発する行為およびそのような両親と絶縁する子供は絶賛されたため、親子関係は最悪な緊張状態に陥っていた。

1980年代以後、20世紀の過激な革命がもたらした家族関係や人間関係の悪化への反省から、儒学の価値が再認識され、孔子もまた「偉大な思想家」として尊敬されるようになっていった。「孝」という道徳は、公民道徳の再建に不可欠な要素として、再び学校教育とマスコミ宣伝の内容となっている。一部の地方政府では、親に孝行を尽くすかどうかを幹部抜擢基準の一つとして定め、「親不孝」によって免職された官僚も現れた。

しかし、現在の中国人が「孝道」を実践する社会環境は、昔とはかなり異なっている。前述の通り、親子関係の不平等及び子供の人権への無視は、漢代から清末までの家族制度の特徴の一つであった。これに対して、現在の中国では、親子関係の平等と子供の人権は法によって守られている。子供の父母への盲従や前述の郭巨のような愚かな孝行は、すでに社会で認められなくなった。また、男尊女卑の社会から男女平等の社会への変化によって、女性は男性と平等に父母の財産を相続できると同時に、男性と同様に親を扶養する義務を負わなければならない。

現在、中国の社会で肯定されている「孝行」に反するものは、「親虐待」と見なしてもいいと筆者は考えている。道徳基準にみる「親虐待」とは、具体的には以下のような行為が考えられる。

第一は、子女が経済的に困難な父母を扶養しないことである。

第二は、父母が病気や老衰などにより日常生活で自立できない場合、子女が治療援助も提供せず、面倒もみないことである。

第三は、子女が父母の心理的、精神的なニーズを無視することである。就職や結婚により父母と別居した子女があまり実家に帰って親を訪ねないこと、父母と同居してもあまり会話をかわさなかったり、無視したりことは、これに含められる。

第四は、子女が父母を尊敬しないことである。これは子女が終始父母と喧嘩し、ぶしつけで乱暴な言葉で父母を罵り、父母に暴力を振るうなどの行為を指す。

第五は、子女が父母の離婚や再婚および再婚後の生活に干渉することである。

第六は、子女が成人になっても経済的な自立を求めず、父母に経済的な負担をかけることである。

第七は、子女が父母の財産権を侵害することである。父母の住宅を不法に占拠し、勝手に父母の財産を処分するなどの行為はこれに当たる。

以上の行為が軽いものであれば、加害者は世論からの非難や行政からの裁きを受けるに止まるが、悪質なものは、法的制裁の対象となる。

2. 法基準による定義

法とは、道徳を守る最低限の強制力をもつ手段である。つまり、法とくに刑法に定まれる罪は、人が犯してはならない道徳的規則の最も基本的なものである。いわゆる道徳責任とは、人々の主観によって判断され、社会の世論や個人の良心によって維持されるものである。これに対して、法的責任とくに刑事責任は、法的規定に基づいて客観的に判断するもので、しかも強制性という特徴を持つ。

ところが、古代の中国法の立法原則は儒学の道徳理念に従ったところが多いため、道徳と法の未分化の特徴を持っていた。つまり、これが刑法か道徳規範かと疑いたくなるような条文は多くあった。また、儒学の道徳理念が家族道徳を中心にして展開したため、家族主義、家長本位は古代中国法のもう一つの特徴を成していた。

道徳により国を治めることを政治の根本とした中国歴代の王朝は、道徳教育、孝子表彰や拔擢などの方法で「親孝行」を説法すると同時に、刑罰という強制的な手段を用いて「親不孝」の行為を懲らしめていた。中国刑法の歴史からみれば、「不孝罪」の罪名はおよそ「孝道」を重んじる風習の形成とともに生まれたのである。今から四千年前の夏王朝では、「不孝罪」は

すでに最も許されない罪として重罰を科せられた。『礼記・王制篇』の記述によると、昔の刑罰には五種類⁽¹⁸⁾があり、さらにこの五刑を細分すると、三千条目に分かれ、その中で罪として不孝の罪はほど大きいものはない。統治者はなぜ「不孝」を大罪と見なしたのか。親を親と思わない者は必ず他人への愛や君主への忠を持たず、やがて社会の大乱を招き寄せる原因となると思われたからである。

秦代と漢代の書物によれば、「不孝」の行為には主として次のようなものを含めていた。

- ① 子が父母を扶養しないこと。
- ② 子が父母の教えに従わないこと。
- ③ 子が父母を軽蔑すること。
- ④ 子が父母を罵ること。
- ⑤ 子が父母に暴力を振るい、甚だしきに至っては殺害すること。
- ⑥ 子が父母を告発すること。しかし、父母が家庭外で犯した反逆、殺人、窃盗などの犯罪への告発を含めない。
- ⑦ 父母の喪中、子が謹んで服喪しないこと。
- ⑧ 正しく家督相続を行わないこと。
- ⑨ 父が死亡した後、子が継母を妻とすること。

当時の法律によって、家長は不孝と思われる子を法廷に送致して裁きを求める権利を持っていた。

漢武帝が儒学の教えを国家思想として確立した後、「不孝罪」の内容は徐々に広がり、量刑も次第に厳しくなる傾向を呈した。

唐(618～907年)律は歴代の律を集大成したもので、その中では、家族、社会の秩序を乱す罪として特に「十惡」を取り上げて重く罰せられた。「十惡」は「謀反」「謀大逆」「謀叛」「惡逆」「不道」「大不敬」「不孝」「不睦」「不義」「内乱」を謂う。その中で、「惡逆」と「不孝」という二つの罪が高齡者虐待に関わるものである。

「惡逆」とは祖父母や父母をなぐり殺そうと謀ったり、近親尊長を殺したりする行為を指す。これは当然「不孝」の行為に属するが、一般の「不孝罪」よりも悪質な行為なので、単独の罪名を作ったわけである。「惡逆」罪への量刑は一律「死刑」である。

「不孝罪」は主として次の行為を指す。

- ① 子(あるいは孫)が父母(祖父母)を告発すること。
- ② 子(あるいは孫)が父母(祖父母)を呪うこと。
- ③ 子(あるいは孫)が父母(祖父母)を罵ること。
- ④ 子(あるいは孫)が父母(祖父母)の生存中、勝手に戸籍を別にして家計を分かちこと。
- ⑤ 子(あるいは孫)が父母(祖父母)の生存中に、経済的援助を怠ること。

- ⑥ 子（あるいは孫）が父母（祖父母）の喪中に結婚すること。
- ⑦ 子（あるいは孫）が父母（祖父母）の喪中に娯楽にふけったり、喪服を脱いで平服に代えたりすること。
- ⑧ 子（あるいは孫）が父母（祖父母）の死を隠し、葬式を出さないこと。
- ⑨ 子（あるいは孫）が父母（祖父母）の死を詐称すること。
- ⑩ 子（あるいは孫）が父母（祖父母）の教えに従わず反抗すること。
- ⑪ 子（あるいは孫）が父母（祖父母）を殺害したかたきと非公式に和解して結末をつけること。

上記の内容に示されているように、唐律が求めたのは、子（孫）の父母（祖父母）に対する絶対的な服従である。このため、「不孝罪」については重罰の原則を取った。前述の「不孝罪」の内、①から③までの罪に対する量刑はいずれも死刑である。子供が親の尊厳や利益を侵害することを許さないだけでなく、服喪など形式的な孝行の義務をも負わなくてはならない。親側の訴えは「不孝罪」の成立要件であり、その処罰については、臀部をたたく（笞刑）という軽い刑罰から死刑まで、罪の重さにより様々な刑罰を科せられた。

宋代から清末までの歴代王朝の法規定は、ほぼ唐律を踏襲したものである。『大清律』ではさらに親の威厳を強め、父母（祖父母）には「不孝」と思われる子（あるいは孫）を役所に引き渡し処断する権利があることを明文化した。親側の「不孝罪」の訴えに対して、役所はその真偽を問わず、まったく親側の要求した通りに量刑する。親が国家の支持のもとで、生殺与奪の強大な家長権をもって家族員を支配した。

1840年に行われた中英間のアヘン戦争は、自給自足の農業自然経済と家父長制を基礎とする中華帝国の崩壊の出発点となった。19世紀末、崩壊寸前の王朝支配体制を立て直すために、清朝政府はやむを得ず欧米の法制度を導入して法律制度の改革を始めた。1911年に公布された改正の『大清新刑律』は、唐律以来の「十惡」の罪名および家父長制度を守る多くの関連条目を廃止した。しかし、この刑法がまだ実施されないうちに、清王朝が滅亡し、中華民国（1912～1949年）の時代を迎えた。

共和政権の誕生に伴って、伝統的な法律文化を支えた儒学およびその祖である孔子は、当時の進歩な知識人に根底から否定され、西洋の法律文化は一層多くの人々に認められた。西洋の立法精神を体現した『大清新刑律』の内容のほとんどは1928年3月に公布された『中華民国刑法』に継承された。

1949年中華人民共和国が成立した後、親子平等は立法原則として徹底的に貫徹された。現行法の中で、昔のような「不孝罪」はすっかりと姿を消してしまっただが、しかし、親の權益が『憲法』『婚姻法』『刑法』『治安管理処罰法』、特に『高齢者權益保障法』などの法律に保障されている。

上記の法律に禁止されている親の權益侵害に関わる行為は、大きく以下の六つにまとめられ

る。

第一は、子女が故意に父母を殺害することである。これは故意殺人罪を適用する。故意に父母を殺害した者は、死刑、無期懲役もしくは10年以上の懲役を科せられる。情状が軽い場合には3年以上10年以下の懲役を科せられる（『刑法』第232条）。ここでいう「情状が軽い場合」とは、過剰防衛や義憤による暴力で人を死に致らせることを指す。

第二は、子女が故意に父母の身体に傷害を負わせることである。これは故意傷害罪を適用する。『刑法』第234条によれば、故意に人の身体に傷害を負わせた者は、3年以下の懲役、拘留もしくは保護観察処分を科せられる。人に重傷を負わせた場合、3年以上10年以下の懲役に処する。人を死に致らせるか、もしくは特別残虐な手段により人に重傷を負わせて重い傷害が残った場合、10年以上の懲役、無期懲役もしくは死刑を科せられる。

第三は、子女が親を虐待することである。『刑法』第260条では、「家族構成員を甚だしく虐待した者は、2年以下の懲役、拘留もしくは保護観察処分を科せられる。重傷や死に至った場合、2年以上7年以下の懲役に科せられる」と定められている。子女が親を虐待する行為はこの罪に適応する。ここでいう「重傷や死に至った場合」とは、加害者の日常的な虐待により、被害者の身体や精神に重い傷害が生じたこと、または被害者が死亡したこと、もしくは被害者が虐待を我慢できず自殺したことを指す。しかし、加害者は故意に長期的な虐待を通して人に重傷や死をもたらした場合、『刑法』第260条ではなく、前述の「故意殺人罪」と「故意傷害罪」を適用して量刑しなければならない。

司法解釈によれば、家族構成員を虐待する行為は、主に次のような身体的・精神的な虐待を指す。

- ① 家族を打ったり罵ったりすること。
- ② 家族をふんじばること。
- ③ 家族に寒さと飢えをさせること。
- ④ 家族の自由行動を制限すること。
- ⑤ 家族の名誉を損なうこと。
- ⑥ 家族に病気を治療しないこと。
- ⑦ 家族に強度の肉体労働を強制させること。

しかし、上記の行為に関して、悪質なものだけは犯罪として認定でき、一回や二回ぐらいで、偶然に起きたものは犯罪として認定してはいけな。また、被害者の告訴なしには処罰が科されず、自訴手続きを要する。

第四は、子女が援助もしくは介護を必要とする父母を遺棄することである。これには二つの犯罪行為が含まれる。一つは、経済力を有する子女が労働力を喪失し経済的に自活できない父母に対して、金銭的な援助をしないことである。もう一つは、経済的に自立できるにもかかわらず、病気や老衰により日常生活で自立ができない父母の介護をしないことである。『刑法』

第 261 条では、「高齢者、子供、病人あるいはその他の生活自立能力がない人に対し、扶養義務を負いながら扶養を拒否した者は、情状が悪質なものである場合、5 年以下の懲役、拘留もしくは保護観察処分が科せられる」と定められてある。

第五は、子女が暴力的な手段で父母の再婚および再婚後の生活に干渉することである。『婚姻法』第 30 条では「子女は父母の再婚権利を尊重すべきであり、父母の再婚及び再婚後の生活に干渉してはならない。子女が父母に対する扶養義務は、父母の婚姻関係の変化によって変わってはならない」と明記されている。『刑法』第 257 条によれば、暴力で父母の再婚に干渉した場合、2 年以下の懲役もしくは拘留が科される。被害者が死に至った場合、2 年以上 7 年以下の懲役に科される。ここでいう「被害者が死に至った場合」とは、被害者は加害者の暴力的干渉により自殺したことを指す。しかし、子女は暴力により父母の婚姻自由に干渉した際に、故意に父母の身体に傷害を負わせた場合、もしくは父母を殺害した場合、『刑法』第 257 条ではなく、前述の「故意殺人罪」と「故意傷害罪」を適用して量刑しなければならない。

第六は、子女が親の財産権を侵害することである。この行為が悪質なものである場合は、『刑法』の規定に基づき懲罰が与えられる。例えば、子女が不法占有を目的として、密かに親の財産を窃取した場合、「窃盗罪」を適用し、欺瞞の手段で親の財産を騙した場合、「詐欺罪」を適用する。また、子女が公然と親の財産を強奪した場合に「強奪罪」で、恐喝の手段で親の財産を手に入れた場合に「恐喝罪」で、故意に親の財産を毀損した場合に「器物棄損罪」で量刑できる。これらの罪に関して、情状が軽い場合は、3 年以下の懲役、拘留もしくは保護観察処分が科される。情状が重い場合は、3 年以上の懲役もしくは無期懲役が科される。

上記の被害についての訴訟は、一般的に被害者本人の自訴を要するが、被害者が自訴能力に欠けた場合には、代理人に訴訟委任することができる。

ま と め

以上の考察から、現在の中国における高齢者虐待は次のように定義できよう。

中国の「高齢者權益保障法」では、「高齢者」を 60 歳以上の者と定義されているので、高齢者虐待の被害者とは、60 歳以上の高齢者を指す。

高齢者虐待の行為は、以下の六つに分類できる。

- (1) 身体的な虐待：高齢者の身体に暴力を加えること。
- (2) 精神的な虐待：高齢者に対する暴言、または交流拒否など高齢者の精神に著しいダメージを与える言動を行うこと
- (3) 経済的な虐待：扶養義務を持つ者が、経済的に自立できない高齢者に扶養義務を果たさないこと。
- (4) 介護・世話の放棄：扶養義務を持つ者が、日常生活で自立できない高齢者の介護や世

話を放棄すること。

(5) 財産権の侵害：不当に高齢者の財産を占有すること。

(6) 婚姻自由の侵害：高齢者の離婚や再婚および再婚後の生活に干渉すること。

上記の行為が軽い場合は、道徳の範疇に属するが、重い場合は、違法犯罪として処理される。

20 世紀の急激な社会変動に伴って、中国の家族は親本位から子供本位へと根本的な変化を遂げた。道徳規範と法律規定が定められた際に、個人の自由と権利への尊重はすでに基本原則として昔の家族主義に取って代わった。しかし、高齢者尊厳への保護および親孝行は、相変わらず社会の基本価値として、道徳と法によって守られている。

〔注〕

- (1) 全国老齡工作委员会弁公室編『老齡工作幹部読本』59 頁，華齡出版社，2003 年 8 月。
- (2) 甲骨文は亀甲や獣骨（主として牛の肩甲骨）の上に刻された文字で，現在知りうる中国最古の文字である。獣骨を焼いて卜占（うらない）を行う法はずっと古い時期から存在したが，そこに文字を刻するのはほとんど殷商時代の安陽期に限られ，他に少数ではあるが，西周時代前半期の遺物も見られている。
- (3) 後漢の許慎が著作した漢字の構成すなわち「六書」に従ってその原義を論ずることを体系的に試みた最初の字書である。
ちなみに「六書」とは漢字の構成ならびに使用に関する 6 原則を指す。すなわち，①指事（図形同士の関係によって抽象的な観念を表そうとするもの），②象形（ものの形をそのままなぞることによってそのものを表そうとするもの），③形声もしくは諧声（文字の一方の要素がその文字の所属を，もう一方の要素が音を表そうとするもの），④会意（要素どうしのそれぞれに意味が交渉し合って一つの新しい意味を合成しようとするもの），⑤転注（互いに相手方の文字の訓詁でありうる考），⑥仮借。
- (4) 『礼記・王制』（市原亨吉，今井清，鈴木隆一著『礼記』（上）361～369 頁，集英社，1980 年 9 月 2 刷）。
- (5) 『論語・為政』（吉田賢抗著『論語』39 頁，明治書院，1988 年 6 月）。
- (6) 『礼記・祭義篇』（下見隆雄『礼記』186 頁，明德出版社，1987 年 12 月）。
- (7) 「曾子曰く，孝子の老を養ふや，其の心を樂ましめ，其の志に違はず，其の耳目を樂ましめ，その寝抱を安んじ，其の飲食を以て之を忠養す」（『礼記・内則』）。「身を慎み用を節し，以て父母を養ふ」（『孝經・庶人章』）。
- (8) 「子游孝を問ふ。子曰く，今の孝は，是れ能く養ふことを謂う。犬馬に至るまで，皆能く養ふこと有り。敬せずんば，何を以て別たんや」（『論語・為政』）。「孔子曰く，菽を啜らせ水を飲ませ，其の飲を尽くさしむ。斯を之孝と謂ふ」（『礼記・檀弓下』）。
- (9) 「子曰く，父母の年は，知らざるべからざるなり。一は則ち以て喜び，一は則ち以て懼る」（『論語・里仁』）。「父母疾有れば，冠者櫛らず。行くに翔せず，言惰らず。琴瑟御せず。肉を食ふも味はひを変ずるに至らず。酒を飲むも貌を変ずるに至らず。笑ふも，矧に至らず。怒るも罵るに至らず」（『礼記・曲礼上』）。
- (10) 「身を立て道を行ひ，名を後世に揚げ，以て父母を顕はすは，孝の終りなり」（『孝經・開宗義章』）。
- (11) 「父に争子有れば。則ち身，不義に陥らず。故に不誼に当っては，則ち子，以て父に争はざる可からず」（『孝經・諍諫章』）。「子曰く，父母に事へては幾諫す。志の従はざるを見ては，又敬して違

はず、勞して怨まず」（『論語・里仁』）。「父母過ち有れば、氣を下し色を悦ばし、声を柔かにして以て諫む。諫若し入らざれば、敬を起し孝を起す。悦べば則ち復た諫む」（『礼記・内則』）。

- (12) 「身体髪膚、之を父母に受く。敢て毀傷せざるは、孝の始めなり」（『孝經・開宗明義章』）。「父母存すれば、友に許すに死を以てせず」（『礼記・曲礼上』）。「子曰く、父母在せば、遠く遊ばず。遊べば必ず方有り」（『論語・里仁』）。
- (13) 孝子は「私財を有せず」（『礼記・曲礼上』）。「子婦は私貨無く、私畜無く、私器無し（『礼記・内則』）。
- (14) 「孟子が曰く。不孝に三有り。後無きを大なりと為す」（『孟子・離婁章句上』）。
- (15) 「子曰く、父在せば其の志を觀、父没すれば其の行を觀る。三年父の道を改むること無きは、孝と謂ふ可し」（『論語・学而』）。
- (16) 「子曰く、生けるには之に事ふるに礼を以てし、死せるには之を葬るに礼を以てし、之を祭るに礼を以てす」（『論語・為政』）。「子曰く、孝子の親に喪するや、哭して依せず、礼は容つくる亡く、言は文らず、美を服して安からず、樂を聞いて樂しまず、旨きを食らひて旨からず。此れ哀戚の情なり。」「喪、三年に過ぎざるは、民に終り有るを示すなり」（『孝經・喪親章』）。
- (17) モンテスキュー著、野田良之ら訳『法の精神』（中）174～175頁、岩波書店、1989年9月。
- (18) 五刑とは古代中国の刑罰体系を指す。二つの意味がある。第1は『書經』『周礼』など先秦時代の古典に現れる五刑であって、墨（いれずみ）、劓（ぎ）（はなきり）、剕（あしきり）、宮（去勢）、大辟（死刑）の5種類の刑罰をいう。第2は唐律以降、歴代の律に現れる五刑であって、笞（軽いたたき）、杖（重いたたき）、徒（強制労働）、流（強制移住）、死という5種類の刑罰をいう。

〔参考文献〕

『礼記』

『孝經』

『論語』

『孟子』

『中華人民共和国刑法』

『中華人民共和国婚姻法』

『中華人民共和国治安処罰法』

『中華人民共和国高齢者權益保障法』

『中華人民共和国憲法』

モンテスキュー著、野田良之ら訳『法の精神』、岩波書店、1989年9月。

楊一凡編『新編中国法制史』社会科学文献出版社、2005年10月。

張晋藩著『中国法律的伝統与近代転型』法律出版社、2005年6月。

ピーター・デカルマーら編著、田端光美ら監訳『高齢者虐待』、ミネルヴァ書房、1998年2月。

〔付記〕

原稿をチェックして、貴重なアドバイスを頂いた現代社会学科の星明教授に心から感謝いたします。

（ちょう へい 現代社会学科）

2009年4月10日受理